

Forest

2011.10.15 3学年通信 第8号

ある学校選択の話

子どもの将来は幼稚園で決まる？

● 2つの会話

最近、ときどき「受験に失敗したら、自分の将来は終わりだ」とか、「いままで希望していた学校（や職場）はあきらめないといけないかも。そうなったらもう先は真っ暗」などという声を聞いたりします。

そんな中で、今回の「進路だより」では、「高校選択」ならぬ「幼稚園選び」の話を紹介することにします。「えっ、何で＜幼稚園＞なんかの話を？」と思うかもしれませんが、けれども、「いったいどこで失敗したら終わりなんだろう？

どこかで終わりってことはあるのか？」ということを考えてみるのもおもしろいと思っています。まあ、気楽に次の文を読んでみて下さい。

「だいじょうぶ、
もういっちょあるさ！」
悩みあれこれ幼稚園選び

中 一夫

＜幼稚園選び＞

3歳になる息子の太郎を、来年の4月から幼稚園へ行かせることにした。……と書くと、とても簡単、当たり前のことに聞こえるけど、親のボクにしたならこれを決めるだけでもなかなか大変なことだった。

幼稚園の入園の手続きが迫ってきた頃、奥さんがいろいろ心配しはじめた。まわりの奥さんたちの研究熱心さにあせりを感じはじめたみたい。

公園などに集まるお母さんたちは、たとえばこんなふうによくしたてるらしい。

「ねえ、幼稚園はもうどこにするか決めた？ ○○幼稚園は英語も教えてくれるし、計算だってしっかり教育してくれるし……。△△幼稚園はしつけはしっかりしてくれるみたいだけど、しつけばかりじゃね。それに……。□□幼稚園は設備はとってもいいわよね。けど、園の教育方針がね……」

奥さんはこういう話題にはうとくて、ほとんど落ちこぼれていたらしい。そりゃそうだ。ボクらは2人で、「うん、一番近い幼稚園がいいよ」というだけで幼稚園を選んでいたので。

そして、太郎も実際そこを見に行ってみて、「遊び道具がいっぱいある」ということで、もうその幼稚園はお気に入り。「そこに入るんだ」と、ずいぶん前から自分で言うようになっていた。だからボクらは全くノン気でいたわけだ。そんなふうに、深く考えず、「それでいいや」ということにしていた奥さんの心も、ま

わりの言葉にゆれる。

「やっぱり私も、もっとちゃんと考えて幼稚園を決めていかないといけないかしら？」……。

そんな時、たまたま読んだ板倉聖宣さんのこんな言葉がボクらをちよっぴり落ち着かせてくれた。

人生なんていうのは先が見えたら面白くないけど、実際には先が見えないし、先が見えないものを「一流校にいきなきゃいけない」とか、「三流校にいきなきゃいけない」「こうでなきゃいかん」ということはいえるはずがないんだ。

〔「人生は転んでもシメタ」『たのしい授業』1991年6月号、仮説社〕

「そうよね、<こうでなきゃいかん>なんてわかるわけないのよね

こんなふうにはっきり言ってもらって何かスッキリしたわ」。奥さんはそんなふうにつぶやいていた。

<幼稚園出願の日>

とは言っても、スッキリしないことは続く。

何と言っても、スッキリしない、あわてたのが、幼稚園の願書の受付の時のことだ。

当日、「8時45分から受付」という文字をたよりに10分前くらいに園に行った奥さんと太郎の前には、すでにけっこうな人が並んでる。しかも、列が動いているところを見ると、すでに受付は始まっているみたい。「ちゃんと時間に間に合うようにきたのに、何で？」と心配しだす奥さん。

しばらくしたら、園長さんが出てきて、

まだ並んでいる10何人の前で言った。「申しわけありませんが、定員に達しましたので締め切ります……」。

ガ~~~~~ン！！

※

奥さんがあわてたのは言うまでもない。そんな事態は想像もしてなかったんだから。パニックになったのは奥さんだけではなかったようで、「何とかありませんか！」と、受付でつめよる人もいたとのこと。奥さんの方は「どうしょう？」というのと同時に、「この子に何て言えばいいんだろう？ あんなに入れるって信じてたのに……」ということに心配していた。泣き虫の太郎のことだから、ここですごく泣き叫ぶことを想像したわけだ。ボクだって、同じように考える。

<だいじょうぶ、もういっちょあるさ>

さて、ビクビクしながらも勇気を出して奥さんは太郎に言った。

「……幼稚園がだめになっちゃった。もういっばいで、入れないんだって……」

そしたら、3歳の太郎は元気にこう答えた。

「だいじょうぶ。もういっちょあるさ！」

奥さんもこれにはまいったらしい。ショックを受けてるのは奥さんだけで、本人の方はアツケラカン。

※

その言葉に勇気を得て、2人はまだ空きのある幼稚園をそれから探し始める。そして、市内ではけっこう有名な幼稚園に行ってみたところ、「まだあいてますよ」ということで、70人定員の69番で無事に申し込みをしてきたんだって。

太郎は、その幼稚園もこれまた簡単に気に入って、庭でいっぱい遊んでから家に帰ったとのこと。あとで他のお母さんから「(最初の幼稚園がダメで、それから他の有名な幼稚園に入れたなんて)、それって、超ラッキーじゃない？」って、うらやましそうに言われたとのこと。

ボクらにしたら、太郎が気に入りさえすればどこでもいいんだけど、そんなふうにうらやましがられるなんて不思議な気分。でも、まあ、とにかく決まってホッとしたよ。

<何がたいした問題か？>

さて、こんなにドタバタした太郎の幼稚園選び。まだ入園するまでは何か月かあるけど、まわりの心配をよそに本人は平気な顔。考えてみたら、そんなのまわりでどんなに「これがいい」とか「これでいいのか？」とか悩んだところで、結局は子ども本人の問題だものね。

まあ、そうはいつでも、親としてやっぱりできるだけのことはしてあげたくなる。

「子どもの未来に少しでもプラスになることをしてあげられたら、考えてあげられたら……」
そう思うのはきっと親として自然な気持だ。

だけど、まだ3歳の子どもの初めての選択。それが人生に大きくかわるとつい思ってしまうことの方が問題かもしれない。

いつの間にか、「そんなのどうでもいいじゃない」と思えなくなっている自分やまわりの人のことを考える。

そういえば、(あとで聞いたところによると)最初の幼稚園で締め切られた十何人のうち、先頭のお母さんは朝の6時から並んでいたんだって。「50人定員のうち31番」というお母さんは何と4

時(!)から並んだとのこと。いったい、先頭の人は何時から並んでたんだろう？

これなら奥さんが8時30分に行ってダメだったのなんてあたりまえだ。

けど、これほどの親の過熱ぶりには、やっぱり何か変な感じがしてしまう。

※

「だいじょうぶ。もういっちょあるさ！」という太郎の言葉。ボクも奥さんもその言葉で、大事なことを思い出せた感じだ。何よりそれで、「ここからスタート」と、次をさがす元気が出たし、実際、それで「もういっちょ」を見つけることができた。たとえ、その「もういっちょ」がなくても、人生長いんだもの、そんなたいした問題ではないよね。

1年待てばいいだけのことなんだもの。

※

ボクらはその時その時のことに頭がいっぱいで、つい、何でも「たいした問題」にしてしまいがち。けど、「そんなことで人生は決まらない」「だいじょうぶ」と言う立場なのは、きっと本当は大人のボクらのはずだ。だって、実際「そう簡単には決まらなかった」ということを身をもって経験しているんだもの。

それどころか、「今でもまだわからない」と思っているくらいなんだから。

自分のことなら「そんなに簡単には決まらない」と言えるのに、特に子どものことになるとそう思えなくなる「親のおちいりやすい危険性」にいま、ちょっぴり気づく。

やっぱり、ボクらの方があわてるのではなく、こういう時こそ、大人としての広い考えや経験を生かせる方がいいなあ。子どもに元気を与えることができたらいなあ。……

そんなことを、自分の子どもの幼稚園選びの中で考えるのです。(1993.11.26)

●おわりにー保護者の方へ

子どもが小さい頃、子どもの進路などについて親はいろいろ期待をします。夢を抱きます。ぱくぜんとあれこれ「これがいいのでは?」「こう進んでほしい」などと考えます。そして、いつの間にか「こうなるものだ。こうさせたい」と思い込んでしまうことがあります。子どもの高校選択を前に、子どもが親が思っていた進路を選ばなかったり、可能性から考えて希望を変えたりという事態に、「目の前が真っ暗」というような感じを抱かれるお母さんやお父さんも中にはいらっしゃると思います。それまでずーっと思っていたそれ以外は想像してなかった設計が狂って、いったいどうなるか想像つかずおろおろして悲観的になってしまうことは、その時は仕方のないことでしょう。

けれども、紹介した例の中にもあるように、また新たに次にスタートできることが、じつは「思いどおりに進めた」ということ以上に大切なことなのかもしれません。人生はそもそも「**どっちに転んでもシメタ**」しかないものです。長く生きている大人はだれでも思ったとおりにならなかったり、自分の人生について悲観的に思ってしまったりする経験しているはずです。そして、「そういう経験が実は大切だった」「その経験がきっかけで新しい道を発見できた」と思い当たるのではないのでしょうか?

※

また、「中学卒業の時の進路選択というものが、どれほどこれからの生き方・将来を決めるのか?」ということも考えます。「進路選択」というのは一生のもので、いままでも、そしてこれからもずっとそういう「進路選択」の場面に子

どもたちは直面するでしょう。そのうちのどの時に、「これで将来は決まってしまう」のか?……実際、大人の私たちは「一回で決まってしまったわけでは全然ないよ」と、自分の人生を振り返って思えるのではないのでしょうか?

冷静になって自分のいままでを考えてみると、「人生はそんなに簡単には決まらないよ」と思えるのに、自分の子どもたちの進路選択になったとたんに、そのことを思い出せないで、ただただまわりの言葉に振り回されたりしがちな「親の立場・親の思い」というものを考えます。

「子どもに幸せを」という親の自然な願いが、時に子ども自身の希望や「まだまだ将来は決まらない」ということを忘れさせることもあるのですね。あわただしいとき、あせったりするときほど、自分が中学生であった時のことを思い出してみたいものです。